

日曜聖書講筈（婦選会館 公開集会）

安息日を活かす人

――マルコ伝第2章23節～3章6節――

1964年6月14日

小池辰雄

キリストの似姿 律法破り 安息日の主 生命賭けでキリストに近づく キリストの中に安らう
 一休と天狗道場 キリストの近づき 神の憐み 安息日を活かす

【マルコ2・23～28】（私訳）

²³安息日あんそくじつにイエスは、たまたま麦畑の中を通って行った。彼の弟子たちは道すがら穂を摘み始めた。²⁴そこで、パリサイ人たちが彼に言った『ご覧なさい、彼らはなぜ安息日に許されていない事、律法にはずれた事をするのですか』。²⁵そこで、彼は彼らに言う『君らは、ダビデが乏しくして飢えたとき、自分と、自分と一緒にの者どもと共に何をしたかをまだ読んだことがないのか。²⁶大祭司アビアタルの時、彼は神の家に入って行って、祭司たちのほかは食べることを許されていないパンを自分も食べ、一緒にの者たちにも食べさせたではないか』。²⁷彼は彼らに言った『安息日は人のためにあるので、人は安息日のためにあるのではない。²⁸だから、人の子は安息日にも主である』と。

【マルコ3:1～6】

¹また会堂に入り給いしに、片手なえたる人あり。²人々イエスを訴えんと思ひて、安息日にかの人を医すや否やと窺う。³イエス手なえたる人々に『中に立て』といい、⁴また人々に言いたもう『安息日に善をなすと悪をなすと、生命を救うと殺すと、いずれかよき』彼ら黙然たり。⁵イエスその心の頑固かたくななるを憂いて、怒り見回して、手なえたる人に『手を伸べよ』⁶と言ひ給う。かれ手を伸べたれば癒ゆ。⁶パリサイ人いでて、直ちにヘロデ党の人とともに、如何いかにしてかイエスを亡ぼさんと議はかる。

●キリストの似姿

小諸の集会で「大地」を学び、またこちらのペンテコステで「風」を学び、京都では「火と水」を学んだ。この四大の消息を通して、イエスの実存に接しました。そして、この前の集会におきまして、「新しき葡萄酒」というところを学び、私自身は或る一つの段階を越えました。非常に感謝しております。我々のこの集会というものは、一人びとりがそ



それぞれの人生の旅路において、前進するための非常に大事な集会でございます。

聖書の御言を食らうということは、私たちが毎日のご飯をいただいておりますが、それは肉体が成長或いはその維持というように役に立っておりますけれども、魂の糧であるところのこの聖書は、これは役立ち方が違う。私たちの人生は地上で終わるものではありません。これは永遠的な質をもつて進んで行くもので、魂は限りなく成長していく。魂は限りなく前進していく。ついに、それぞれの個性をいただきながら、キリストの似姿になっていく。そういう偉大な目的を私たちは持つております。

私のような極めて取るに足らない、また惨憺^{さんたん}たる存在ですが、そういう惨憺たる者が、神の恵みと救いによりまして、このような生まれつき希望も持てないところの者が、偉大な希望を抱かしめられたということは、どう考えてもこれは恩寵^{おんちよう}そのものです。もし、「私の如何^{いかん}」ということが問題であるならば、私は今日限りこの講壇を去らなければならない。けれども、私は、パウロの言葉を借りるならば、「罪びとの首^{かしら}」でよろしい。いや、実に罪びとの首としての自覚を、パウロ的な意味におきまして、いよいよいただき、問題はない。ただ、キリストを証言し、また、キリストに化せられていくという恩寵を証する人としてであるならば、私は死に至るまでこの福音を伝えざるを得ない。

「我、福音を伝えずば禍害^{わざわい}なるかな」

とパウロが言った境地はそれであると思います。

皆さん一人ひとりも、それぞれの器によりまして、福音の証者であり、また伝道者です。どうか、そういう使命とまた光栄とを担った存在であるということをいよいよ深めていただきたい。また、我々のこの集会というものが、そういう意味において、前進また前進である。決して、この肉体が食物をいただくのとは意味が違う、質が違うということをはっきりと自覚していただきたいと思います。

●律法破り

今日は「安息日を活かす人」と題しました。マルコ伝2章を学びます。ユダヤ人たちが、この安息日をとにかく守るということは非常なものです。これは私がこないだイスラエルに帰りに寄りましたときにも、つらつらそれを見、また感じました。ご承知のとおり、金曜日の日没から土曜日の日没までがユダヤ人の安息日です。電車も自動車もみんな止まってしまいます。それから、煮炊き^{にた}というものはみな、その日没までに済ませて、安息日には物の煮炊きをしてはいけません。その他いろいろ戒律があつて、それに今でも保守的に非常に従っているわけです。交通が一切止まってしまうから、旅行者は動けません。闇^{やみ}の自動車が多少は動いてはいましたけれども、私はそういうものを使いたくないから、安息日に動かないですむように、日程を少し早めて回ってきました。

イエスが居られた頃のユダヤ教におきまして、もちろんそういうわけで、安息日に禁



じられているところの、いろいろな仕事は39種類あつて、それから、その39種類に対して更に234のいろいろな禁止の行為の条項があつたそうです。もちろん、煮炊きのことも、また医者が病人の世話をするのも、いけないということが書いてあつたそうです。

3章のところでイエスはこの律法を破つた。実にイエスという人は、その当時の戒律宗教の安息日遵守^{じゆんしゆ}を破つた人です。

「自分は律法を毀^こたん^ぼに來たのではない。全^{まつ}うせんが為に來た」

と言われたイエスは、表面上は律法を毀つた。律法を破つた律法破りですね、イエスという人は。だから、祭司や教師のご連中に嫌われたのも無理はない。

「この異端者、この新興宗教者め」

というようなわけで、とうとう終いには十字架という始末です。

そういうややっこしい宗教的な戒律というものに、宗教の本質といえますか、主眼があると考えられているところに大きな間違いがあるということを、もちろんイエスは感じられて、そしてこれを本当の意味における、神の活ける律法の事態に開示していくというのが、彼の使命であつたわけです。これはもちろん、預言者たちがそのことを既に祭司宗教に対して――紀元前9世紀の半ばあたりから7世紀の終り頃にかけて預言者たちが輩出しましたが――彼らがみなその活ける律法の宗教を展開して行つた。そのために彼らもまた迫害されていたわけです。その預言者の宗教を受け継いでこれを全うしたのが、言うまでもなく、イエスである。

●安息日の主

23 ^{あんそくじつ}安息日にイエスは、たまたま麦畑の中を通つて行つた。彼の弟子たちは道すがら穂を摘み始めた。24 ^{びと}そこで、パリサイ人たちが彼に言つた『ご覧なさい、彼らはなぜ安息日に許されていない事、律法にはずれた事をするのですか』。

麦畑を通つていたところが、ちょうどお腹もすいていたので、弟子たちがその麦の穂を摘んで食べ始めた。それを食にしようとしたわけです。ところが、そのことは安息日に為^すまじきことというわけで、パリサイ人たちが直ちにこれに抗議を申し込んだ。そうしたら、イエスはダビデの故事を引用された。これはサムエル前書21章1節から6節に出ている事柄です。ダビデが流浪の旅において、ギベアにいたサウルの所から更に逃れて、エルサレムの北の方のノブの地に行つて、

「ダビデ、ノブにゆきて祭司アヒメレクにいたる。アヒメレク懼^{おそ}れて

というのは、サウルが恐いものだから、

ダビデを迎えこれにいいけるは汝なんぞ独^{ひと}にして誰も汝ともならざるや。

2 ^{ダビデ}ダビデ祭司アヒメレクにいう、王我に一つの事を命じて我にいう我が汝を



遣わすところの事およびわが汝に命じたる所については何をも人にしらす
なかれと。我其の処に我^{わが}少者^{わかきもの}を出おけり。3 いま何か汝の手にあるや、我
手に五つのパンか或はなににてもある所を与えよ。4 祭司ダビデ^{こたえ}に對てい
けるは、常のパンはわが手になし。されど若し^も少者婦女^{わかきもの}をだに慎みてありし
ならば聖きパンあるなりと。

^{そなえもの}供物の聖きパンがある。それをやるよ、それならやれる、と言うんです。

5 ダビデ祭司^{こたえ}に對ていいけるは實にわがいでしより此三日は婦女われらに
ちかづかず、且少者^{わかきもの}等の器は潔し又パンは常の物のごとし。今日器に潔き
パンあれば殊^{こと}に然^{しか}と。

自分たちには、その供物の聖きパンを受ける態勢はなっているから、聖別されているから
というわけなんです。

6 祭司かれに聖きパンを与えたり。其はかしこに供前^{そなえ}のパンの外はパンなか
りければなり。」（サムエル前21・1～7）

そういうことが書いてある。祭司だけが食べられるところの供えのパンを、自分たちは
聖き生活をしているからもらえらんだと言つて、ダビデがその時にもらつた。女人禁制み
たなことが書いてありますが、

「女性^{女性}は汚れたもの」

なんていう思想がこの旧約の中に多少ありますけれども、新約においてはそういうことは
ありません。

とにかく、そういうようにして、彼らも安息日にパンを食べたではないかと、イエスは
言われたわけです。

25 そこで、彼は彼らに言う『君らは、ダビデが乏しくして飢えたとき、自分と、
自分と一緒にの者どもと共に何をしたかをまだ読んだことがないのか。26 大祭
司アビアタルの時、彼は神の家に入つて行つて、祭司たちのほかは食べるこ
とを許されていないパンを自分も食べ、一緒にの者たちにも食べさせたではな
いか』。

と、キリストはその故事を引き出して、証言されたわけです。また、

27 彼は彼らに言つた『安息日は人のためにあるので、人は安息日のためにあ
るのではない。

別なところで、

「食物は腹のためで、腹は食物のためでない」

という言葉があります。

28 だから、人の子は安息日にも主である』。

「人の子」というのはもちろん、イエス彼自身の特別な表現です。メシヤです。



「メシヤたる自分も安息日には主である」

と。一体、私たちはこの安息日というものを、なるほど私も20歳の頃から、無教会の内村先生、藤井先生、塚本先生と三大集會に列席させていただいて参りました。また、自分でも集會を皆さんとこのように開いて、既に20何年かになるんですが。安息日の自覚は、私たちは分かっているようで、さあ、どの程度のものであろうか。

●生命賭けでキリストに近づく

エレミヤ記30章21節のところに、

「²¹その首領は本族よりいでその督者はその中よりいでん。我彼をちかづけ彼に近づくかん。誰かその生命を繫て我に近づくものあらんやとエホバいう。」(エレミヤ30・21)

とある。ヤーヴェーの神さまが、

「我彼をちかづけ彼に近づくかん。誰かその生命を繫て我に近づくものあらんや」

と。生命賭けで主さまに近づくという。生命を賭けてキリストに近づくという、この言葉が私には非常に響きました。私たちは不用意に「生命賭け」というような言葉も使います。けれども、私たちが本当にこの生命を賭けるという―ただ、人から聞いているのではなくて―本当に生命賭けでということをも自分の生活の、魂の本当の性格としているか。

「性格」「キャラクター」というのは「押しで」という字です。胸の中に押しでの印を押していることです。押しでで押されたるものというのが「キャラクター」です。生まれつきの性格はついに変わらず、

「三歳児の魂百までも」

なんていう。けれども、「人新たに生まれる」ということは、新しきキャラクターをいただくということなんです。生まれつきのキャラクターに対して天来のキャラクターをいただく。もしこれがなかったならば、私たちは生まれつき運命論者になってしまう。

「どうせ、こういうように生まれついているんだもの」

というふうなことになるでしょう。福音というものは、生まれつかざるものを新しく生まれつかせる。そういうものを与えるものは、これを福音という。でなければ、福音という「絶対次元」とか、「新しき」とか言ったって、ちつとも新しくはない。

「日の下に新しきものなし」

というが、しかし、キリストはその本当に新しきものを与える方である。不滅の新しきものを与える方である。この新しきものをいただくというのは、棚からばた餅式にいただくようなことではない。やはり、

「何はさておき、他のものはどうでもいい、唯だこの一事を」

と言って、生命を賭けてこれを求める。求めは正に、生命賭けの求めである。



「求めよ、さらば与えられん」

という言葉が、いかに重厚な言葉であるか。「賭ける」という言葉は「博打^{ばくち}」の賭けるという字ですからね。博打をうつやつは、最後は裸になるまで、自分の着ている着物までそこに投げ出すという賭け方をする。あとはもう自殺の他はないというような。これが本当の博打の精神でしょうね。

生命を賭ける。生命賭けでキリストを求める。そこには今度は、新しき、もはや何ものとも代えることができない天来の生命が来るわけです。「ソーマ」を捨てて、「ゾーエー」を得る。「ソーマ」というのは生まれつきの生命です。「ゾーエー」というのは永遠的な生命です。ソーマを賭けてこのゾーエーを得るといふ、そういう生命賭けです。

「生命を賭けて近づく者あらんや」

と、神さまがエレミヤにこう言った。こういう一つの聖句を瞑想するだけで、何とも言えない幸いな境地に入れられる。

●キリストの中に安ろう

安息日とは即ち、生命を賭けてキリストに近づくことである。キリストの中に安息することである。キリストの中に安ろうことである。

「キリストの中に安ろう」

とは眠ることではない。キリストの中に安ろうとは、そこにおいて驚くべき生命に与かることである。キリストを生命賭けで求めてその生命の中に安ろうということは、驚くべき生命をそこにいただくという、安らいの中にももの凄い動力源が来るわけです。六日間、突っ走るところの、六日間の働く活動力の源泉がこの安息日において来る。安息日をそのように受けとらなかつたならば、まことに無駄である。また、そのような安息日を持つとうしないならば、どんなに六日間を一生懸命やつても、それは疲れるばかりです。そういう意味において、私たちは活力源をこのところにあるにいただくというのが、この安息日です。活力源をいただきながら、その活力を自由自在に、安息日行使したのがイエスです。安らいながら動く。静中に動在りという。イエスという人は正に神の中に安ろうた。その静けさの中に動を持って、静動一如の在り方をしている。

そのことはその次の3章の始めに書いてある。安息日に為^すまじき事を彼はした。即ち、手の萎^なえたる者の手を癒した。律法には

「安息日に癒したらいかん」

と書いてある。その律法をイエスが破つたものだから、

「何とかしてイエスを殺してしまおうと、彼らは計り始めた」と書いてある。

神の法則の中にすっかり入って、イエスは律法以上の本当の律法、神の喜び給うところ



の法則、靈法の中に入って動いておられた。安息日を本当に活かす人はイエスである。私たちが安息日に安らいながら活かされている。これが即ち、安息日に生命を賭けてキリストに近づくということです。生命を賭けて、キリストをわが胸の中に迎えるということ。

そういう意味において、このイエスという人は何と自由闊達な、神の生きた法則の中で動いておられた方かということです。人間の作った宗教的戒律をもって神の生きた御言の法則にすり替えてしまったのが当時のユダヤ教であり、また宗教はしょっちゅう――何もキリスト教にかぎらない――宗教がだんだん盛んになると、逆にそこに律法的なものができあがってくる。外側は大きな大伽藍がらんを造つてみたり、いろいろな組織を作りあげて、一つのヒアラルヒー（ピラミッド式な階級組織）をそこにでっち上げてしまったり。カトリックの悪口を言うわけではないが、事実そうなつてしまった。カトリックにももちろんいいものが中にたくさんあります。けれども、そういったようなことが、実はキリストの宗教ではなかった。

「我は活ける神殿である」

と。この神の宮は、

「天は即ちこの天井であり、青草は即ち床である」

というような大殿堂である。内村先生の無教会精神がそこにあった。

神が安息日に本当に主である。そして、その神と一つになっていたいたキリストは即ち安息日の主、彼自身が主宰者である。律法は何百何十何個かある。それを外側から守るなんて、そんなものではない。それは却つて人を苦しめ、生命を窒息させるものである。キリストは神に安ろうた。その静において深い動をいただいていたという、こういう事態が安息日を活かしていたところのイエスの実存である。そして、いわゆる安息日破り、道場破りです。キリストは道場破りをやった。

●一休と天狗道場

とにかく、道を求めるということが生命賭けであると、ヘタすると生命を落とすくらいな危険なことがある。マルチン・ルターもそうです。いかにして我は神の前に義であるかという問題で彼は悩み苦しんで、独房でぶつ倒れてしまった。もう少し放っておけば、そのまま息が絶えてしまったと、彼は後で述懐している。ドアを蹴破つて入ってみたところが、彼は真つ青になつて倒れていた。

道場破りということで、面白い話があります。皆さん御存知の一休和尚です。一休さんは、堅田のお舟の中で端坐して禅を組んでいた。明け方に鴉からすがカアと啼いた時に、啼いた声とその飛ぶ姿で、その本当に自由闊達な姿に彼は豁然と悟りを開いたということです。応永27年5月20日ということだそうですが、それで、一休は禅の道で或る一つの段階を踏み越えて、悟りの境地に入つたわけです。



彼が越前の武生^{たけふ}という町にやって来た。その町に相田隼人という人がいたそうです。それは一応、剣道の達人でありまして、道場を開いていたわけです。ところが、自分の武芸が鼻にかかっているような鼻持ちならないという人だった。ところが、一休はちょうどその道場の前に通りかかったたので、

「ああ、ここが噂に聞くとところの天狗の営んでいる道場か」

なんて言った。天狗道場。そいつは自分の武芸を大いに誇っている。そんなことを言ったものだから、その門番の門人がその言葉を聞いて、

「この変な野郎は、なにをそこでうそぶいているか」

と言って、集まって来たわけです。

「今、あの坊主が変なことを言いやがったんだぞ」

と。一休は立ち止まって、ニコニコしてその弟子たちの前に行きまして、「頼もう」と言った。そうすると、その門人は、

「旅のお坊、どちらからお見えなされたか」

「うん、あちらから来たよ」

「あちらとはどこだ」

「まあ、強いて言えば、天竺^{てんしゆ}と言っておこう」

「ここは聖なる道場である。お前みたいな汚らわしい乞食坊主の来る所ではない。正面から入るわけにはいかなから、勝手の方へ回れ」

と。そこで、一休は勝手の方へ回って行って、

「横車を押しては大儲けをしているという話じゃ。金持ちに違いなからう。わしは今、腹が減っているから、御馳走してくれ」

と、一休は言った。

「折角だが、ここは武芸の道場で、宿屋じゃないんだから、お前は飯屋に行ったらよからう」

「何か欲しかったら、勝手口へ回れと言ったじゃないか。それだから来たんだ」というような問答をしまして、

「これは氣違い坊主らしい」

と、みんなが非常に悪口を言いだした。とにかく、そういうわけで、隼人に

「こういう変わり者がやって来たが、どうしましょうか」

と言ったわけです。そうしたら、

「台所に上げて、ありあわせのものでもやったらよからう」

と。それで、

「ご出家、こちらへいらっしゃい。先生のお許しを得たから、齋^{とき}を参らせる」

と。「齋^{とき}」というのは坊さんの食事のことを言う。そこで、一休は草鞋をぬいで、雑巾で足



を拭いて、つかつかと上がりまして、道場の上座にあるところの隼人の座蒲団の上に坐つてしまった。一休の腰には木剣が携えられている。坐つてから、何を言うかと思うと、「ちよつと断つておくが、わしはまずいものは嫌いだから、おいしいものを食わせろ」

と。その高弟が奥の方へ入って行つて、隼人に告げた。

「木剣を持った乞食坊主で、『愚僧はまずいものは嫌いじゃからおいしいものをどつさり進ぜよ』と言つております。それにこの道場に入つて来る時に、『ここが噂に聞く天狗の道場か』と生意気なことを申して、ニヤリとしたそうです。普通の氣違いとは少し違うようでございます。何か含みを持っているようでございますと。そこで、主人は、

「これこれ、道場には道場のおきてというものがある。勝手なことをしてはいかん」と言つて、一休をなじつたわけです。一休は、これが道場の主人の隼人だと思いましたので、「御馳走を頼む。腹がへつて困る」

と、臆面もなくまた言つた。そうすると、隼人が

「旅のかた、拙者は早く両親を失い、仏道を信じているから、旅僧には相当の挨拶はするつもりだが、そんな勝手な振る舞いをする、捨ててはおかんど」と言つた。

「どうなさろうと言ふのじゃ」

そうすると、隼人は、木剣を持つているのに氣がついたものですから、

「旅僧は剣道をたしなまれまするか」

「いや、たしなまぬ」

「それでは、その木剣は何のためにお持ちですか」

「世の偽物にせものに見せたいためじゃ」

世の中の偽物に見せたいためにこの木剣を持つていると言う。隼人は、「偽物？」と言つて、非常に訝いぶかつて、また問いかける。一休は、

「世の偽物はこの木刀のようなものじゃわい。これはこうして腰に刺すと、刀のようなものじゃけれども、鞘さやから抜いて前に突き出すと、やはり木片じゃ。人を殺すこともできぬし、人を活かすということもできぬというものじゃ」

と。本物なら活殺自在だけれども、偽物はどうすることもできないというわけですね。隼人は怒りがぐつと胸に來たものですから、

「では、旅僧はそれを見せようと言われるか」

「お前にも見せたいねえ」

「このくそ坊主め、覚悟せよ」

と言つて、いよいよ打ちかかろうとしたわけです。一休は相変わらず平然としていて、



「どこからでも打っておいで」

と言いました。隼人は木刀を振り上げて、じつと睨^{にら}んでいる。門人たちには、この旅の僧の生命が風前のともしびのように見えた。けれども、振り上げていた木刀を隼人はなかなか打ち下ろそうといたしません。そのうちに、隼人の額には大粒の汗が滲みだしてきた。それで、門人たちは、どうしたことかと思つて、顔が曇りだした。隼人は木刀をがらりと投げ捨てて跪^{ひざまず}いた。そうしたら、一休は、

「なぜ、打たん」

「打たれるのは私の方でございます」

と、隼人は完全に一休の前に参つてしまう。一休はただ端坐しているけれども、これが打てない。もちろん、一休は武芸のたしなみもあつたが、ただ武芸のたしなみというだけではない。彼の魂が本当に坐つた魂であつた。静中に本当の活殺自在の動が入っているわけです。静中に本当の動を宿しているから、一休が坐つていて、その端坐している所にすぎないわけです。打とうとしても、これは打てない。隼人が

「蓮如上人から承つております。あなたは多分、一休禅師ではございませんか」

と、相手が一休であることに気がつきましてね、一休は蓮如と非常に親しい間柄でしたから。

「そうか、貴公は蓮如の信者か」

というようなわけで、だんだんそこで話が和らいできました。

「申し訳ありません」

「腕をみがくだけではダメじゃ。心を鍛えなければ本ものとは言えぬぞ」

心を磨けと。

「せめても、その木刀を記念にいただきたい」

と。禅者の木刀をいただいた。

「坊主には、もともと木刀は不要のものじゃから、それは置いて行く」

と言つて、そこを立ち去つたそうです。

このように、そういった一休に限らず、昔の高僧というものは本当に自分のうちに仏の力を、また仏の道を身に体している。道とは即ち身に体した真理であると申しましたが、身に体せざるところのものはみんなダメです。

私がもしここで天狗道場を開いているなら、私は今日辞めなければならぬ。皆さんとこのようなキリスト道場を開かしていただいているのは、この昔の一休に限らず――また、あの四十七士の魂もみなそうです――生命を賭けても貫く実存である。生命を賭けてもあの仇討ちである。

「生命を賭けても」

というのは、本当にこれを果たしたあとは、彼らは自害することはちゃんと決めてある。これは説明のできない素晴らしい世界です。



私が、軍人で接したうちで素晴らしい人は、あの終戦の時の阿南陸軍大臣^{あなみ}です。あの人は幼年学校の校長をしていた時から、私はこの人はやがて陸軍の最高の地位につくと予感した。彼は本当に部下たちの間違いや、いろいろな欠点を全部自分が引き受ける。そして、言葉少ないけれども、本当に身にすべてを負っている人でした。実に平つたい――一端、壇上に立てば、実に権威のある話をなさいましたが――一緒にご飯を食べている時なんかは、本当にこちらが恐縮するような平べつたい、平つたい気持の方でありました。果たせるかな、この大戦の終戦の時に真先に責任をとって自刃^{じじん}をされた。

●キリストの近づき

我々の人生、生き方というものは――先程の二つの讃美歌も、「主よみもとに近づかん」と「みもとに我ゆく」というのを特に歌っていただいたのはそういう意味あいからです――生命賭けで主の御許に近づく。その時に私たちに対して、

「我汝に近づく」

という、神さまの、キリストのこの近づきがあるから、私たちは本当に近づくことができる。こちらが近づくのに、あちらが「お前みたいなやつは」と言われたのではどうにもならない。けれどもむしろ、

「お前みたいなやつだからこそ」

と言って、近づいてくださる。人間は品定めするけれども、神さまは品定めなさらない。ルカ伝15章のごとくに、魂砕けて近づく者には、誰彼となく無条件に近づいてくださったことは、福音書を読めば、キリストのその態度によく分かる。また、ローマ書12章を読んでいたいただいたのも、この「霊の祭」ということです。私たちの生涯を捧げてこそ、本当に豊かな力が自由自在に展開していく。

「何という人生となってきたろうか」

と、もう説明できない何かがあなたの方の胸に、全存在にこみ上げてくる。

こういうキリストの近づきに、本当にこちらから生命を賭けて近づいてみたらば、驚くべき別な生命が、新しきキャラクターが我がうちに展開を始めていく。我がうちに泉と湧きいで、火山と噴き出るという事態になってきます。これが即ち、私たちが安息日を守るということは――もはや「守る」という言葉が当たらない――安息日を活かすものである。私たちは安息日を活かす者であって、安息日の奴隷となっている者ではない。何も、この集会に来ることが安息日を活かすことでもない。或る時は、どうしても、或る所へ行つて、或る人を助けなければならないことがある。大いにやってください。とにかく、安息日というものを本当に神によって、キリストに近づくことによって活かされ、人を活かす。生命賭けで近づいて、そして活かされ活かしていく。また、六日間を本当に活かすものは、この安息日をそのようにして受けとるものであるというわけです。



今の一体のように、彼は彼の中に本当に道が、剣道の道が生きていた。この一体は、道が生きていた。坊さんでありながら、ちゃんとその道を生きていた。剣道の技術の達人はとてもかなわない。それはもう魂の世界ですから。私たち一人びとりが――何も、頭を剃って坊主になることはないですが――心は、本当に昔の高僧の心を私たちは持ち得る。こういうものを読むと、何だか知らんが、魂に、心に響いてくるというのは、やはり、私たちは日本人ですので、そういったものを非常に楽しく読める。そしてまた、これを本当に読めるということは、我々の中に福音のキリストの光が、キリストという道が入りつつあるからです。

道場を破ったところの、この一体そのものが即ち、本当の活ける道場であった。神殿をぶつ壊し、律法を壊す者が実は律法を本当に建てる者です。

「宮は要らん」

と言う者が本当にその人が宮となる者である。教会は要らんと言う者が本当の教会とたなくては。ただ要らないことがいいのではない。自分が本当の教会に、我々一人びとりが本当の幕屋にならなければ、それはどんなに聖書を読んでみたってしょうがない。

そういう意味において、キリストは安息日にかくのごとくに自由に活かした方であった。また、私たちは、かくして、安息日を本当に活かすことができる。

●神の憫み

今日は3章の方はするつもりはありませんでしたけれども、連関していますから、ちよつとその先まで読みます。

1 また会堂に入り給いに、片手なえたる人あり。2 人々イエスを訴えんと
思いて、安息日にかの人を医すや否やと窺う。

安息日に人を癒してはいかんとという律法があるものだから、何か畏にかけようと思つているわけなんだ。

3 イエス手なえたる人々に『中に立て』といい、4 また人々に言いたもう『安息日に善をなすと悪をなすと、生命を救うと殺すと、いづれかよき』彼ら
黙然たり。5 イエスその心の頑固なるを憂いて、怒り見回して、

とんでもないパリサイどもだ、という気持です。キリストにとつては、このパリサイは非常にキリストの聖なる怒りをかきたてる者です。罪びとにはキリストは憫みをもつて、苦しんでいる者や泣いている者、罪を犯したものにどこまでもそれを救おうとするが、「俺たちは」と言つて神の霊に逆らってくるやつは、キリストは非常な怒りをもつてこれに臨まれる。

手なえたる人に『手を伸べよ』と言ひ給う。かれ手を伸べたれば癒ゆ。6 パ
リサイ人いでて、直ちにヘロデ党の人とともに、如何にしてかイエスを亡ぼ



さんと議^{はか}る。

律法破りのとんでもないやつが来るから、そいつはけしからんから、抹殺してしまえというわけだ。安息日に麦畑の麦を取って食べたり、また安息日に禁じられているところの癒しをした。

「何とお前たちは頑^{かたく}なな律法でもって魂を枯渇させて、縛られているか。それが神の御意か」

と言うのです。手足の萎^なえた人に――今でいうと、中風だの小児麻痺みたいなことなんでしょよね――「手を伸ばせ」と言われた。神の憫^{あわれ}みは、その神の力が、神の御意がこのイエスの中に充満して来ますと、イエスはそこで言葉を爆発させる。そして、相手の者が本当に救いを求める。

疑ったり、逆らったら、ダメですよ。これは物理の法則とは違って、霊の法則の世界は、霊に逆らう者は、神さまは或る時は恐るべく打ち給う。或る時はそれを放っておかれる。打つことはなさるが、逆らっている者をただそのまま救おうとはなさらない。サウロも、

「サウロ、サウロ、なんぞ我を迫害するか！」

と、キリストにやられた。まず、サウロはぶつ倒されなければならなかった。それから、彼は憫みによって救われる。聖霊のバプテスマを受けて、

「我が目より鱗の如きもの落ちたり」

ということになった。

苦しみ求めている者には、主の憫みは無条件にかかってくる。そして、「手を伸ばせ」と。受けとる方は、

「キリストは今でも奇蹟をなしたもうだろうか。自分の祈りは聞かれるだろうか。

こんなことはどうだろうか」

というような、疑いや或いはいろんな憶測があるうちはダメです、信仰の世界は。そこに現象しようとしなかりうと、神の御意に適^{かな}う、自分を投げかけたところの祈りは、自我を主張する祈りではなくして、自分をそこに投げ出したところの、神の栄光の現れとして、神の恵みとして、神の道として、現れるところの事態に対しての棄身の祈りは必ず聞かれる。その憫みがかかってきたら、もう問題はない。だから、この場合の、手の萎えた人は、「手を伸ばす」という行為が即ち、信である。行即信なんです。信行一如なんです。伸ばさない前は動かないんですよ。

「祈っていたら、動くだろうか？ 聞かれるだろうか？」

では動かない。動かないものを、神の言葉を「はいっ」と――それはもちろん、心の中で信ずるといふ、受けとるといふことが一番根源です――「はいっ」と信じ受けとることと同時に伸ばす。伸ばす前の現実、行き詰まっている現実です。しかし、「はい」と信じて伸ばすという行為とは、もう信と行とは全く一つです。そうしてみたら、動かないはず



のものが動いた。今までの経験では、自分の判断では動かないはずのものが動く。これが神の法則の、神の力の、神の憐みの発動するところの世界、事態です。

もし、そうでないなら、私たちは結局、行き詰まりです。何も手の癒えることばかりではない。生まれつきの才能とか、生まれつきの性格とか、いろいろなものがお互いさまにあります。どうにもならんですよ、正直。そいつを突破するのは、突破させようとしている神さまの力、それに対する無条件の信、全的な投げかけです。私たちは、投げかけることすらもできないところに居て、その御言は――聖書の御言、神さまの御言は聖書に書かれた文字ではないんですから――書かれた文字を通して、その文字の奥から私たちに現に今叫んでくる、現に今呼んでくる。

皆さんが、我々が普通の生活で聖書を読むというのは、その現実において、時々本当にどうしてここを開いたかと思うところを開かされることがある。行き詰まったり、

「どうしようかな」

なんて思うときに。アウグスティヌスもそうでしたが。そこで直ちに活ける御言として私たちがそれを受けとる。一番大事なのは、やはりそういうこと事態、全体の中が祈り心でなくてはいかん。

神さまの中に本当に安らい、その祈りを、その恵みを受けとる人をここにつくつたらいい。イエスは事実をもつて、頑ななパリサイ的な律法を破り給う。イエスの伝道そのものが始めっから生命を賭けていた。生命を賭けて神の道を、生命を賭けて神の真理を伝えられた。

●安息日を活かす

どうか、皆さんは、人間小池なんでもものに躓かないでいただきたい。私は時々、自分のいろんな癖が出ましてね、あなた方の気持ちを傷める^{いた}ようなことがあるでしょう。けれども、どうか、そんなことで躓かないでいただきたい。私は泣きます、そんなことで躓かれたら。どうか、皆さんは、このダメなやつを通して、神さまがどうしても伝えたいところのこの福音を、この土の器を通して開示されている、神の悲願を、本願を、キリストの悲願本願を、どうか受けとっていただきたい。

なぜ、キリストの十字架が、我々の集会にいつも立っていないかならないか。十字架されたこのキリストにおいて、私たちは本当に互いに許し、互いに信じ合うためです。我々クリスチャンの実存を語るに、ローマ書12章にまさるものがないと言っていにくい、クリスト者の実存はローマ書12章に言い尽くされています。パウロのこのローマ書12章を時々静かに読んでごらん下さい。キリスト者の実存を、パウロはこのローマ書12章において本当に魂を砕き涙を流して書いた。

生命賭けで私もいよいよ進んで参ります。であるから、私にもキリストが生命をいよいよくださいます。天狗道場ではない。偽物ではない。私自身がどんなに惨憺たる者であつ



でも、私は偽物ではない。この福音は本当に我に迫って――「わが信仰」でもなければ「わが確信」でもない――十字架を通した御霊で貫かれた者は、誰に憎まれ誰に躓かれ誰に誤解されても、行かざるを得ないというものを持っております。

どうか、そういうことで、私はどこまでも、これを告白していきます。その他に私は行くところがない。

「生命を賭けて誰か我に近づく者あらんや」

という表現は、何とも言えない響きをもって、胸に迫ってまいります。皆さんと、この集会を、安息日を持つことの、本当の醍醐味といいますか、楽しさと讃美がこみあげてくる。どうか、この音信を、これを知らない方々にいかにもして伝えるように。そして、福音は、サマリヤの女の如く、

「来たりて視よ」

という世界です。ただ、文字の世界ではない。

「つらつら目にて見、耳にて聞き」

という現実の世界です。

かくして、我々の魂は魂に^{こた}応え、心は心に応えて――安息日に本当に私たちは、ただ集会を守っているのではなくて――本当に集会を活かすもの、安息日を活かすものとして、この安息日を受けとつていき、自在な生き方をする。

「今日はどうしても行けない」

というのは、ただ自分の都合ではなくして、

「神の使命のために今日は別な所に参ります。それは共に安息日を活かすためです」

という、そういう在り方を、どうか、いらつしやらない時は、していただきたいと思えます。このようにして、我々の大事な、聖名のための使命ということをいよいよ深くせしめられ、また、夏の集会に向かって備えをしていただきたいと存じます。では、今日はそこまで。

